

新年に送る年賀状の発行枚数は、メールや SNS の普及で長期的な減少傾向にあります。2004 年用の 44 億 5000 万枚をピークに、2026 年用は約 7 億 5,000 万枚とピーク時の約 6 分の 1 に落ち込んでいるそうです。ましてや、「暑中見舞い」はなおさらのこと。ピーク時は、1993 年で約 3 億 4000 万枚あったそうですが、近年は約 1 億 4000 万枚まで落ち込み、くじ付き暑中見舞いはがき「かもめーる」は、利用者の減少によって 2021 年 3 月をもって廃止されました。

その「暑中見舞い」ですが、猛暑期に普段なかなか会えない方やお世話になった方の健康を気遣い壮健に過ごしてほしいとの願いを届ける夏の挨拶状です。近況報告などをかわす意味合いもあります。その由来は、お盆に里帰りする際、直接、品を持参して先祖の霊に捧げていたことによるそうです。江戸時代になると、お世話になっている人全般の贈答の習慣になっていきました。遠方で訪問できないお宅には、飛脚便を使って贈り物や書状を届けていました。それが、明治 6 年の郵便制度の発達とともに、この贈答の習慣が簡素化され、挨拶状を送る習慣になっていき、大正時代に現在の「暑中見舞い」という形が定着しました。

「暑中見舞い」は二十四節気の小暑（7 月 7 日頃）から立秋（8 月 7 日頃）までで、立秋を過ぎると「残暑見舞い」として送ります。遅くても処暑の候（9 月 7 日）までには届くよう送るのがマナーとなっています。今から夏の挨拶状を出すならば、すでに 8 月 7 日を過ぎていたので、本来ならば「残暑見舞い」となるわけです。しかし、まだまだ 35℃を超える暑さが続いています。「残暑見舞い」というよりは「酷暑見舞い」、「猛暑見舞い」であって、「残暑見舞い」は、10 月頃に出すことになるのでしょうか。日本の夏は白い雲、広い海、ひまわり、スイカわり、風鈴、花火、浴衣での夏祭りなど懐かしさを感じるものであったのですが、今の子どもたちが大人になったときに思い出す夏のイメージとはどんなものでしょうか。そう思うと心が寒くなります。

さて、どれだけ夏が暑くても、受験生にとってはこの夏休みの過ごし方いかんで、今後の進路が決まってくるといっても過言ではありません。受験生以外の学年でも、これまでできなかった学習分野を克服するための貴重な時間です。すでに残り僅かになりましたが、暑さに負けず、2 学期に向けて準備をしておきましょう。

